



教育文化総合研究所
【第7回研究交流集会】

2024/3/16

ささやかなコメント

菊地 栄治



【平野さんへ…】

- ①国に言われる前から生徒のエンパワメントの必要性をふまえて、「主体的・対話的で深い学び」にも長年取り組んできた松高ならではの組織的取り組みについて、生徒たちの言葉から描き出している点は（実践の価値と同じく）貴重である（esp.教員同士の関係性）。
- ②紹介されている数名の生徒たち以外の「ゆたかな学び」にも、彼女たちが変わりゆく姿による影響を及ぼしていったと考えてよいか？マスの生徒たちも自分事化し、彼女たちとは別の場でさらなるアクションを起こしていった…そんな現象はあったか？
- ③紹介された取組事例をふまえて、小・中、あるいは普通科等他学科・他高校の先生方に対して「このようなことが参考になるかもしれない」という要点を挙げていただきたい。他校に異動したときに、松高のここは生かせるがここは難しい…という経験はなかったか？
- ④今年はポピュリスト政治の帰結として高校入試改革の影響を松高も受けているのではないか？（定員割れ問題）松高の頑張りを全国に広げていくための物質的・人的手当はどうあるべきか？それとも制限された範囲で最大限努力をすればよいと考えているか？



【孫さんへ…】

- ① 当事者との信頼関係を構築し、3名の教員に半構造化インタビューを敢行されたことはまさに対話の可能性を自ら示しており示唆的である。直線的思考に陥らず、身体性にも目配りされる「ホリスティックな視点」は研究の「深さ」の証でもある。
- ② 3名の生活史の吟味を経て、「観立てる力」が鍵となると観立てる。これは倉石さんの「深さ」ともつながるものの、個体能力論を想起させる「観立てる力」に還元する論理は果たして妥当か？望ましい人間像が前提とされている点を含めて急ぎすぎではないか？
- ③ 「観立てる力」に資する対話的空間の形成の要諦は、異質な他者との関係の中で自らの「問い」を構築することにある。弱さを含み込む「人間の限界性」（わかり得ないことも含めて）と実践をめぐる自由や裁量の幅を保障することこそがキモなのではないか？
- ④ 総じて授業場面の記述が少なく、子ども自身の言葉が間接情報としてしか聴こえない。さらに、3名の教員の語りからは教員同士の関係性が見えてこない。教員同士の対話の条件（時間的余裕も含む）によって支えられた教員の「ゆたかな学び」が欠けていないか？



【倉石さんへ…】

- ① 「深さ」に焦点化し、チャールズ・テイラーの学説にもとづき、「重要性の地平」を共有する意義を論じている点は示唆的である。闘争と葛藤を排除しないままに対話を重ねることに「社会に開かれた教育課程」との結節点を見出すことも重要な指摘である。
- ② 「社会に開かれた教育課程」という理路を探し出そうとするあまり、国家の教育政策の無謬性を前提とする議論に陥ってはいないか？教育研究者自身の「真正性」が問われているとはいえないか？そうだとすれば、それは何か？
- ③ 「社会に開かれた教育課程」を持ち出さなくても、生徒の切実さに寄り添い、対話を通して自らも変えられていく教員による内発的な学校づくり・授業づくりの試み…とすれば済むのでは？今次の学習指導要領以前の試みこそが「真正」なのではないか？
- ④ 資源の制約を不問にしたまま、社会的課題を解決するための学びに生徒や教員を動員しているということはないか？社会的課題がどこから来て何に由来しているかについての「不都合な真実」から目をそらさせることに加担する論理に陥ってはいないか？



【お三方へ…】

- ① 「主体的・対話的で深い学び」という国が設定したゴールに応答しなくてはいけない...という発想自体を問い直そうということにはならないのか？そのこと自体が「ゆたかな学び」を遠ざけ、むなしい回り道をさせていることにならないか？
- ② 「ゆたかな学び」としての「主体的・対話的で深い学び」という論理が正しいとしたときに、その前提となる社会像をどのように描いているのか？そして、その社会像が「真正」であるという根拠はどこにあるのか？
- ③ 司会の澤田さんを含めて、大学教員として教育実践にもかかわっているはず...。だとすれば、それぞれ「主体的・対話的で深い学び」に正対するような実践（授業など）をしているのか？（可能であれば）入試のあり方とも絡めて説明してもらいたい。
- ④ 他のパネリストの発表について、「ここは違うと思う」という違和感があれば自由に語っていただきたい。